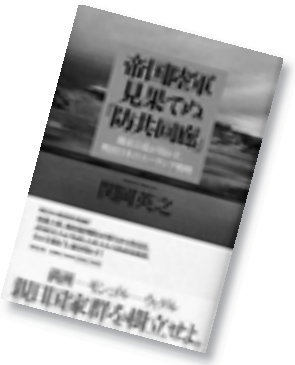
「帝国陸軍 見果てぬ『防共回廊』」



著者：関岡英之
出版：祥伝社
発行：2010年3月25日

筆者の関岡英之さんは、慶応大学を卒業後、東京銀行に勤務し、中国駐在も経験されている元金融マンである。日米構造協議や米国政府から日本政府への「年次改革要望書」など貿易摩擦や日米関係の著書が多い。そういう経済関係の著書を書かれている方が「チベット問題」など中国の少数民族問題、異民族統治政策に関心を持ち、銀行員のころから、研究を続けていたというのは驚嘆に値する。同時に、この本の内容も驚くべきものだ。

戦前、日本はなぜ満州国を建国したのか、その反対に当時のソ連はなぜモンゴル人民共和国を建国したのか。それらは漢民族の民族同化政策のもと、自文化を守ろうとした中国内の少数民族の反漢民族意識を利用しての政策（日本は共産主義の浸透を防ぐ意味での、ソ連にとっては共産主義を中国内に浸透させるための）であったという（そのほかの理由もあっただろうが）。

さらに当時の関東軍はチベット、ウイグル、モンゴル内の漢民族に抑圧されていた少数民族を支援して、満州国のような独立国家を複数設立し、それらが独立後、日本と同盟することを通して、中国の共産化を抑止し、中国との戦争を終結させようと考えていた、と言うのだ。それを筆者は「防共回廊」と呼んでいる。

現在もくすぶり続ける中国のチベット問題や、ウイグル問題の根本原因が本書を読むことで腑に落ちる形で理解できる気がする。また、中国を旅すると、「清真」と書かれた清真料理（中国在住のイスラム教徒向け料理）の店をよく見かけるが、北京や上海といった中心都市を含む中国内のイス

ラム教徒は数千万人という。これら中国国内の宗教問題をいちはやく見抜き、回教徒を支援することをとおして、中国国内の政情不安を引き起こそうとしたのも戦前の関東軍であったという。この工作には蒋介石も相当にあわてた、と筆者は述べているが、このような親イスラムの姿勢は現在の我が国の外交政策としても有効なのではないだろうか。

孫子の兵法にあるとおり、外交の要諦は「遠交近攻」にあるという。中国との関係が難しい最近の情勢であるが、戦前には国家戦略が確実にあったということを理解することができた（さまざまな異論はあるであろうが）。

大阪府立大塚高等学校
教諭　岡本利昭